

272

傳報

作部長チノハ
艦船の損害大ナ
リト云フヨシヨシ
神武作氏五郎全
才王と具申し
ト云フハ艦船
巨以之損害ナリ
命ナリ
ニ云フハ未ダ
艦船の作部長
巨要ナリ

軍司令官ノ
軍部長ニ
激即チ云フ
今食セラフ
訓示
皇國ノ栄光ニ
此ノ功ニ
今皇特ニ
盡命ノ大
艦船ノ
軍司令官
軍司令官

293

五月四日

船の積込は曉まで

既午に船を

出帆し首尾を

後方船に列し

航行す

〇八三〇—〇九〇〇頃

我船運分の諸君

神島英海軍に

素子の沖艦艇

に炸裂

B一撃とC一撃

C一撃とB一撃

既午に船を

出帆し首尾を

後方船に列し

航行す

〇八三〇—〇九〇〇頃

我船運分の諸君

神島英海軍に

素子の沖艦艇

に炸裂

B一撃とC一撃

C一撃とB一撃

29

八月十一日(金)

海上艇隊の艦と
無血に陸を制す

北と

子の方

柳子(附)出

と報す

一同安堵と云ふに

此大なる男予
順調なるは厚に
すし我世悲する
大に當るをたし
傷に迫るを怒る

八月十二日(土)

接しと
る本太にさす
樹塊にさす

夕刻

首領此にさす

北に神宮持交を

揮す

前田世例の古風

敵の右にあり太正

は子の方の報に拘る

依之 十橋川津長

岸に迫るにあり

276

八月十三日(日)

④司令部内室

午後には、氣勢揚々
御殿より浮城に就け
て居る女す
消息をくく何家
か量するところなり
自らの氣勢を
吟笑し、昔の事
を深き心から予
計併思ひの相違
は是れ角も甚き候
としこの態を不謹慎
あり。

296

八月十五日(水)

地作が、因難世に
 敵初艦夜中
 敵艦を逐次之喪
 子もや迫るに帰
 せり。
 奪はくは敵機団と
 戦創り長上は
 歸せし人こそ也
 一八〇〇攻勢断今
 に決せし。
 残るあり

八月十六日(木)

本日、敵艦を
 先導して、便命
 したるものと云
 す。
 三度決る陸海軍
 戦を敵陣の作戦
 要望し活動せし
 三度敗る。
 懸念に堪えず
 目下し。
 昔は長遠を
 寸金買ひ、決心
 死し和議あること
 分れよと留めせよ。

(*)八月十七日

決て、
 一六〇〇、
 命令、
 せし、
 たり
 三光、
 廿五、
 訓、
 二、
 実、
 「
 密、

八月十八日(金)

○五月廿二日
此勢中は後の世に
此運よりあるに
構えたる一を
おとす計を
嘆息・運法は
あり

277

278

八月十九日 (土)

大本多考表

五斗三斗

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

八月二十日 (日)

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

一斗

299

八月廿一日 (卯)

蘇の攻勢を断る
に父兄よりや
蘇の攻勢は必し
断る

五月廿二日

茅渚平様
軍持之を日
勘ふ所し
初向、持之の
勘ふ所し
まゝに甲一
勘ふ所し
勘ふ所し
勘ふ所し

八月廿二日

一、二とあり
四、五とあり
積もるは軍
知るは時
敵師団とある

作戦は打撃
へかゝると
打撃は打撃
可なり
敵軍は
西軍は

孝子

300

八月廿五日 (金)

○五月台

大詔奉戴日
作歌同好会
子

三度月は全年

晴大評担陽会

五字和しなより

三ツノ公報

五月三日近南新地

上陸軍ノ死傷

一四二八三

一八九三四

終

八月廿六日 (土)

合計	二七二五	九〇〇〇	二
陸軍	一〇〇〇	〇	〇
海軍	五二	〇	〇
航空	〇	〇	〇
合計	二七二五	九〇〇〇	二

322

八月廿七日(日)

○ 聖印の因

○ 站 立

政

① 子文

命令一

○ 平 卷 水 竹

船破陸上死

北
境

2

1

Q
Is
the
W
x
y
z

八月廿八日(月)

五ノ

前碑諸所激我

全般巧

大正變化

生第由天新

五

家

タルカ
如
主

一

刺刺不待夜

家之寶

中華書局

卷之六

自來水不孝一

ル 2 ヲ

八月廿九日 (火)

五月十日

前々南側地
内り地と云
南岸地と云
斗激烈なり

作長運送
お内り方面
固保す
一六の秋前
首重と云

八月三十日 (水)

仲根三向

柳平太様
于相会々
知りて
不堪

本白文
読書
八月十日
八月十日

204

八月廿一日 (木)

詳しう健康
ヲ新し奉ル

五月十日

菊水より結果
ハ来るん
所はるは素に
うしと
連録様二回

九月一日 (金)

雲霧未だ待
身一刻長
沖筑作戦
古里國ノ安
方

御子々々全
無修降伏
一傳人死
運力ニ解
不
不

九月二日(土)

九月三日(日)

206

九月四日(月)

探春 戴笠
畫自尋春不見
春枝葉踏破
笑重雲歸來
試把梅花見
春在枝頭已了

207

九月六日(水)

九月六日(水)

○五月十一日

其作名早末より

梅子原阿全野

結末(三巻)

中作命早末より

ナリリ(三巻)一巻

ラゴ里(三巻)

中作命早末より

新入。如

海老原(三巻)

水原(三巻)

Handwritten scribbles or marks on the right page.

九月十日(四)

○三三の約定通り
飛平主氏信年
成り得ずと念
看水せし
帰倦す并松敷
如く唄とある
登り溜りたる
書頭一戸外に
乾す
昭々飛平世信
すすまた世信
後す

九月十一日(五)

夕刻此十時
予は角り
するの報に接
信長並に
隨り者
存あり
山事年々
振年々
日野年々
はる
○山事年々
二時年々再出
二時年々再出
二時年々再出

川博書、民前機
馬事書、
再心ゆりし。

司令あり
 手あり
 夢あり
 部下
 切郎の
 延子
 子の中
 よく眠り

吉柳文子
健斗
河野中
一
二

國歌文隊
健花敵敵方貴
威擄亂

日暮し 腸をさす
 連夜 横世 果敢
 慮せし
 以 研 居 火
 事 也 あり (400)

370

2 //

九月十四日 (木)

○ 五十五

○ 三三 出雲守

サー 天保旧態

良中 下

飛鳥 様事 載 成平

サ 七 信 号 五

侍 心 (着 小 園 親

と思 心)

止 慮 する 天 仁

任 する 地 方

中 津 の 漁 夫 事 様

入 強

九月十五日 (金)

○ 五十六

○ 三三 出雲守

サー 天保旧態

良中 下

飛鳥 様事 載 成平

サ 七 信 号 五

侍 心 (着 小 園 親

と思 心)

止 慮 する 天 仁

任 する 地 方

中 津 の 漁 夫 事 様

入 強

3/2

九月十六日 (土)

○ 又 又 又

本はもあらけ事なり
 其心すゝと雖も詮ふ
 敵艦を道子破り
 國外にたゝ利業
 の心あり
 一條とて苦に思ふし
 こそこの信をよきこと
 二 隠れに身とせば
 こと
 三日之に當ることも

九月十七日 (日)

四のめり

本はもあらけ事なり
 の心あり。我子に
 利子に依るの
 故に
 すもひに自盡し
 我の足るるも
 是なり

3/3

九月十八日 (CH)

此の部は
軒入は選抜
批評せしむるも
見る芝蘭も
雅いとおつて
の外子し
大方隊を
八曲のあ
にあらう
他、一と相

九月十九日 (CH)

頼むに
形も様事
坊合を
剣井行
一節準備
トコト
胸には
りたる

2/4

九月二十日 (水)

○ 3月15日

空の空念

徳田蒲地列る

の古伝感嘆に

わ世

我が行こんより

文接する云も

老漢の横雲に

いよりいす

山平堀西軍也

○ 3月15日

空の空念

徳田蒲地列る

の古伝感嘆に

わ世

我が行こんより

文接する云も

老漢の横雲に

いよりいす

山平堀西軍也

2/5

九月廿二日(金)

Ｂの或る相
手あり
轉々と由り
て夢々む
のりし奴
夜將園外に在る
こを段に九日
此処具を取
るに極あり

九月廿三日(土)

十由一十
殺傷六〇〇と
運玉・桃
一平良一末
五喜氏一
子
西翼の面
改へん由